

37. 奈良市における作業療法士と保育士の 連携システム構築とその効果に関する研究

- 高畑脩平 (奈良県総合リハビリテーションセンター 主任技師)
大久保めぐみ (愛の園保育園 園長)
田中佳子 (愛の園保育園・特別支援教育士)
上田美 (奈良県障害者総合支援センター・主任保育士)
能地由貴子 (あけぼの会夜間保育所 園長)
米田光子 (こだま保育園 副園長)
玉村公仁彦 (奈良教育大学付属幼稚園 園長, 奈良教育大学 教授)

【研究目的】

奈良県では、医学的療育支援事業として当センターに勤務する作業療法士（以下、OT）が、地域の保育園を巡回し、発達障害児への直接支援、保育士へのコンサルテーション支援を行っている。その際、保育士の「集団運営の視点」とOTの「個を分析する視点・活動分析の視点」とを掛け合わせる事により、発達障害児にとって過ごしやすい質の高い集団保育が実現した。またアンケート結果より、発達障害児を含めた全ての子どもにとってOTが持つ感覚統合理論の視点が有用であることを得た。そこで、本研究では、これらの協業を汎化させることを目的に、「保育×作業療法の冊子」を作成し、奈良市の全幼稚園、保育園、子ども園（以下、園）へ無料配布を行う。更に、この研究を基盤に医療 - 福祉 - 教育 - 行政の連携を深め、地域支援システムを構築するための布石とすることを目的とする。

【研究の必要性】

発達障害児への治療的介入手段の一つとして、感覚統合療法（Sensory Integration Therapy:以下SIT）がある。SITは、1960年代に米国の作業療法士A. Jean. Ayresにより体系化され、学習障害児に対しての治療法として確立された。現在では、自閉症児への治療法として世界で3番目に多く使用されている（Green et al. 2006）。当センターでも、就学前の発達障害児（疑いも含む）に対して、SITによる介入を行い、高い満足度を得ている。しかし、作業療法のオーダー数は、1000人を超え、OT一人当たりの担当数は、100人を超えている。そのため、治療頻度も月1回で60分のみとなっている。

一方、奈良県内で、最も人口が多い市町村は奈良市である。発達障害児（疑いも含む）へのフォローに関して、奈良市こども発達センターを中心に精力的に行われている。しか

し、健診によるフォロー数は、他市町村に比べると圧倒的に少ない割合である。結果、保育園・幼稚園・小学校の現場では、フォローが遅れた子どもたちによる不適応が目立つ。そのため、奈良市における保育園・幼稚園・小学校と医療との連携が急務であった。

このような医療機関で処方される作業療法の量的問題と、奈良市における発達障害児へのフォローの現状、更には国家を挙げて取り組んでいる医療費の削減へ向け、医療モデルから生活モデルへの転換を行う必要があった。そこで、本田が考案した3階層モデル (Honda et al. 2011) を基に、奈良県版の地域支援療育事業を企画した。その結果、奈良県障害福祉課より当センターに、医学的療育支援事業として委託された。実際に連携を進める中でも、保育士と作業療法士の協働により成果を得られることを多数経験したものの、協働したのは奈良市における 97 園中 15 園にとどまっており、全体の取り組みとして汎化させていく必要があった。そこで、①OT の専門性の啓発、②保育士と OT の協業場面の紹介、③協業による効果、の 3 点を示すことが必要であると考えた。

【研究の方法・内容】

研究の必要性①②に対応して、『OT×保育士の冊子作成と配布』を行った。また、研究の必要性③に対応して協業の意義を問う『アンケート調査』を実施した。

『OT×保育士の冊子作成と配布』

I) 冊子作成に向けた会議

冊子作成に向けて、保育士での会議を 10 回、OT での会議を 10 回、保育士と OT での合同会議を 5 回、OT と編集アドバイザー・監修者との会議を 8 回、全 32 回の会議を実施し、内容の検討を行った。

II) 作成された冊子の概要

冊子は全 72 ページであり、前半と後半の 2 部構成となっている。前半は、OT により感覚統合理論に関する内容を記載した。子どもの発達における、感覚、運動の重要性や、園や学校での気になる行動の背景に感覚統合の問題があることも踏まえて記載を行った (図 1)。



図1. 目次と、前半部分の作業療法士が執筆した「感覚統合理論」に関する記述

後半部分は、保育園で実際に行われている保育活動の写真と共に、実施した保育士が「活動への導入」「保育内容の留意点」「ねらい・保育士の思い」を記載した。また、保育士の記載した内容の下に、作業療法士による活動の発達の意義を記載した(図2)。



図2. 後半部分：保育士と作業療法士が協業で執筆した「保育活動」に関する記述

III) 冊子の配布

奈良市の公立保育園 16 園, 私立保育園 24 園, 公立幼稚園 29 園, 私立幼稚園 15 園, こども園 11 園, 国立幼稚園 2 園の合計 97 園を対象に無料で配布を行った。配布方法は、奈良市の園長会や研修会の場にて共同研究者が配布を行った。また、配布できなかった園に対しては、後日郵送にて配布を行った。配布にあたって、本冊子作成の動機、冊子の意義・使用方法を記載した紙面と、アンケートへの回答を依頼した。

『アンケート調査』

冊子の配布対象となった園に対するアンケート調査に加えて、冊子作成に携わった保育士を対象にアンケート調査を行った。内容は、「協業する意義」を検討するために、自由記述設問による回答を求めた。得られた結果は、質的研究の手法の一つである KJ 法により分類を行った。なお、分類に客観性を担保するために、3名の OT により分類を行った。

【結果】

冊子の配布対象となった 97 園へのアンケート調査は、現在回収待ちの状況である。そのため、冊子作成に携わった保育士を対象としたアンケート調査の結果を報告する。

該当者は 6 名で回収率は 100%であった。協業する意義に関連する総ラベル数は 21 枚であった。それらを 2 つの小カテゴリーと、5 つの中カテゴリー、2 つの大カテゴリーに分類した。中カテゴリー [OT の視点理解] [日頃の保育の振り返り] から大カテゴリー〈協業の過程での意義〉を抽出した。また、中カテゴリー [ねらいの明確化] [視点の拡大] [保育の充実感] から、大カテゴリー〈協業の効果〉を抽出した。更に、[視点の拡大]における小カテゴリーは「子ども理解」「遊び」であった (表 1)。

表 1. 「協業する意義」を問うアンケート結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
協業の過程での意義	OT の視点理解	
	日頃の保育の振り返り	
協業の効果	視点の拡大	子ども理解
		遊びの分析
	ねらいの明確化	
	保育の充実感	

【考察と今後の課題】

本研究では、「保育士×OT の冊子作成」を行い、作成に携わった保育士より「協業する意義」に関するアンケートを回収した。

KJ 法により分類された大カテゴリーは、「協業の過程での意義」「協業の効果」の 2 つであり、これは冊子作成の過程と、冊子完成後の両時期において、意義を感じたものと考えられる。

冊子作成過程での意義（大カテゴリー：協業の過程での意義）においては、保育士が日頃行っている保育を、他職種である OT に対して「保育活動のねらい・留意点・思い」などを説明する必要があり、客観的な言語を用いて日頃の保育を振り返る（中カテゴリー）機会となったと考えられる。また、日頃の保育活動に OT の視点を重ね合わせることで、OT の視点理解（中カテゴリー）がより深まったと考えられる。

冊子作成後の協業する意義（大カテゴリー：協業の効果）において、OT の視点が加わることで、子ども理解（小カテゴリー）や遊びの分析（小カテゴリー）といった視点の拡大（中カテゴリー）が伴ったと考えられる。また、子どもの実態に合わせて、ねらいを明確に持てるようになった（中カテゴリー）ことで、保育の充実感（中カテゴリー）に繋がったと考えられる。

以上より、他職種が連携する上で、一つの明確な目的に向かってお互いの知恵を出し合う過程に、意義があることを示唆している。今回は、冊子作成という目的に向かいお互いの専門性を出し合えたことが上記の結果に繋がったと考えられる。すなわち、「教える-教えられる」の縦の関係性ではなく、「共に学ぶ、知恵を出し合う」の横の並びで取り組むことが大切であると考えられる。

今後は、冊子を配布した園よりアンケートの回答が得られるため、本研究の有効性を更に検討し、連携システムの強化に向けて取り組んでいきたい。

【経費使途詳細】

項目	金額
デザイン・印刷費	279,720 円
機器購入費（カメラ、手描き用タブレット）	56,298 円
会議交通費（会議 32 回）	18,000 円
合計	354,018 円
大同生命厚生事業団助成金	300,000 円